

終戦より入ソ

千葉県 吉野 靖

たしか昭和二十年八月九日、ソ連軍越境のニュースが司令部内に飛ぶ。十日、十一日、またたく間にソ連戦車が山の彼方に見え隠れする。戦闘機はひっきりなしに銃撃して来る。友軍の戦闘機の姿はさらになし。十二日の夜を期して全軍横道河子に後退することになった。

空はソ連軍の照明弾で昼のようだ。そちこちに戦車砲の弾が爆発する。十五日、司令部より天皇陛下の無条件降伏の詔勅が伝えられる。十七日ころだったか、ソ連の武装解除を受け、千人編成の一個大隊。

それから毎日「ダモイ東京」の言葉を半信半疑での行軍、五日くらい歩いたろうか。着いた所はソ連。窓一つない貨車にスシ詰めにされ、夜になると西か東かわからない。おろされた朝は、港のよう。本当にダモイ東京だ。みなが喜んだ。だが、潮の香りがしない。波がない

ない。みな顔が一斉に青ざめた。それもそのはず、ソ連領の湖畔であった。

片言にソ連の通訳が、お前たちは全員ソ連軍の捕虜である。今日からラポータにつくのだと言われた。隊内でデマが飛ぶ。俺たちはさんさん使われたあげく、最後は殺されるのだ。そして不安がつのる。

私達の最初の仕事は稲刈り、場所はイーリンカ。私はラーゲル内の病人の診察に当たる。だんだんとシベリアの寒さも日増しに厳しくなつて、与えられた食料は一切のパンと塩水スープ、四重の鉄條網に囲まれたラーゲル。仰向けに寝ることができず、横になっただけのスシ詰め二段重ねのねぐらであった。

戦友の顔は日ごとに青ざめてくる。全員が慢性的な下痢症だ。伝染病の赤痢にかかった状態の毎日である。ひよろひよろな身体を軍靴でお尻をけとばされながら、ラポータに追い回される。ダワイダワイと毎日続く。栄養失調はますます全員がひどくなる。

辛さに耐えかねて、ある夜、二人で鉄條網の下をくぐって逃走、間もなく銃声が響く。翌朝全員集合。庭に

は二人の死体が横たわり、見せしめに、お前たちが逃げるところなのだ、ソ連将校が日本語で話す。みんなの顔がぞっと青ざめて来る。

そうした毎日が続くうち、雪も降り積もり、みんなの身体にはシラミがたかり、かゆくて睡眠がとれない。栄養失調に拍車がかかる。目がさめれば隣の戦友が冷たく動かない。今日二人、明日は三人、昭和二十年、極寒の暮れから翌春までの間に何十人、何百人だったかじくになった。その数は今では記憶が定かでない。

せめてもの遺族にかたみにと、亡き戦友の親指の骨を遺骨に準備すれば、事あるごとに身体検査でソ連軍に没収されてしまった。まさに生き地獄というのであろうか。おそらく体験した者でなければ想像できないことであらうと思う。

亡くなった戦友の屍は、毎朝ソ連のマシーナに丸太のごとく凍りついた死体を積み込まれ、何キロ離れたか、防空壕のような穴に投げ込まれていった。同じ日本人として手厚く葬ることもどうすることもなすべがない。涙を吞んで敗戦のみじめさをつぶさに感ずる。

部隊は半年か一年くらい経過するごとに、部隊の半数くらいとどこかに連れて行かれ、変わりの戦友たちを連れて来る。赤化思想の教育であったのだ。新しく仲間になった中には、特別に赤化教育を受けた何人かがまじっていた。昼間はラポータ、夜は共産主義マルクス、レーニン主義、史的唯物論の本を一人一人に与えられ、説明され、天皇制について毎晩の教育、反共の言葉でも態度でもしようものなら、大衆の前に引き出され、批判会、自己批判を強いられる。あくまで抵抗すると、ソ連の兵隊にどこかへ連れて行かれてしまう。心はどうであれ、表面は共産主義を讃美しなければ、自分の明日はどうなるかわからない。

またダモイ東京にだまされ、私もどこかへ連れて行かれる仲間に入り、着いた所はガリオンキ、れんが工場の粘土掘りの仕事であった。それもノルマノルマに追い回され、入ってから二年目くらいか、毎日の食事の岩塩スープに若干の米がまじってきた。名ばかりの米のスープ、空腹に耐えられなく、ラポータの合い間には野良の毒草であれ何であれ、緑のものはようしゃなく摘み取っ

て、缶詰の空カンで湯がいて塩をかけ、空腹の足しにする。

もちろん、便所は野良に穴を掘り、丸太橋、下は真っ青の泥海のよう。幸いにして生き残った人たちも、生ける屍同然、三年目の冬を迎え、あたりは銀世界となる。零下三十度。

十一月半ばころだったか、またダモイ東京、だまされたと思いつつ、貨車に乗せられる。何日だったか走り続けた。今度こそ本当の潮の香りのする港に着いた。大きな舟が岸壁にいる。日の丸の旗がひるがえて見える。祖国の旗日の丸。その喜び一生忘れることのできないうれしさであった。本当のダモイ東京が実現したのだ。

どんなにかこの日を待ちわびたか、青ざめたみんなの顔が幾分赤みがさして見える。帰ったら腹いっぱいめしを食いたい。一列に順番の乗船、入り口にて手厚く厚生省の係官から「御苦労様でした」とかけてくれた言葉、どんなにかうれしく、また安心したことであろう。

ナホトカ出港、舞鶴に着く。船内ではそちこちで感情の爆発、ラーゲル生活、赤化教育の恩返しとでもいうべ

きか、仕返しである。「この野郎」の言葉がそちこちで大声に聞こえる。船内の係官の注意もあり、大事に至らず、祖国の上に第一歩を踏みしめたのが昭和二十三年十二月四日であった。うれしさは忘れることができない。

上陸を終え、今度は一人一人米軍から個室に呼ばれ、在ソ中のあらゆる見たこと、聞いたこと一切を調べられ、メモにおさめられ、厚生省から各自引揚証明書に手当金を頂戴して、故郷に帰る客車に乗せられ、ようやく自由の身となった。

抑留中、尊い犠牲となられた多くの戦友に、心から哀悼の言葉を捧げ、恒久平和を祈りつつ、思い出を綴ってみました。

騙されて地獄の二年

新潟県 三間 國松

終戦、ソ連の支配下にはいった私達松輪島部隊は、九月二十六日、ソ連輸送船に乗せられ、南下、船底につめ